

「女性的に書く」とはいかなる身振りか

——イリガライの差異の哲学にもとづいて

横田祐美子

要約

本稿は、英米圏で「フレンチ・フェミニズム」の代表格として知られるリュス・イリガライの哲学に寄り添いながら、女性的エクリチュールがいかにして可能かを考察するものである。その際、イリガライ哲学のキーワードである「性的差異」が言わんとしている「差異」を、ジャック・デリダの「差延」を経由することで明らかにし、彼女の哲学もまた脱構築思想に与するものであることをあらためて確認する。イリガライが提唱する女性的に書くことや語ることは、男性的なエクリチュールに対置される別のエクリチュールを創造することではなく、既存の二項対立に取り憑きながらも、その権力体制を暴き立てるものである。そこでの「差異」は定立された何かと別の何かのあいだにみられる固定的な差異ではなく、たえざる過剰としての差異化の運動を指している。「女性的に書く」とは、そのような力動的な差異の運動のなかで生じる事態であり、何かとして規定されることからたえず逃れつつ書く身振りを表している。

キーワード：イリガライ、女性、エクリチュール、差異、フレンチ・フェミニズム

1. はじめに——エクリチュールにおける性的差異

書きものにおいて、文体と性はどのように関係しているのだろうか。性別偽装による文体変化の特徴を考察するための日本の実験では、男性が女性になりすます際に漢字の使用率が有意に減少し、ひらがなの使用率が有意に増加したこと、そして女性が男性になりすます際にはさきほどとは反対の現象が生じたことが報告されている（財津・金 二〇一八：一八一—一八八）。ここから、いわゆる男性的な文体とは漢字が多くひらがなの少ないものであり、女性的な文体とは漢字が少なくひらがなの多いものだというジェンダー・ステレオタイプの影響が読み取れる。言い換えれば、それは男性の文章は「かたく」、女性の文章は「やわらかい」といった先入見を表している。

このような男女の差異にかんする偏見は世間一般においてのみならず、アカデミックな場においても根強く残っている。たとえば「男性は論理的で、女性は感情的だ」というよく知られた言説は、先入見や偏見にもとづくはずがないと考えられてきた自然科学が長きにわたって「信仰」してきたものである。この言説が裏づけを欠いたまま科学における女性差別に加担しつけてきたことは、ジャーナリストによってすでに指摘されている（Saini 2017 = 二〇一九）。つまり、私たちが客観的かつ中立的なエクリチュールだと思い込んでいたもののなかには、男性（さ

らに言えば西洋人かつ白人男性の健常者)を基準としたものが数多く紛れ込んでいるということだ。そこでは性別を問わないはずの「人間」(man, homme)という語が、英語でもフランス語でも同時に「男性」(man, homme)を意味している。そのため、中性性には高い確率で男性性を取り憑いており、中性的なエクリチュールと見なされてきたものがまったくもって中性でも無性でもないことが明らかになる。エクリチュールとは、性の問題から完全に解き放たれた次元ではなく、そこにおいて「性的差異」がひとつの争点になりうる次元なのだ。

ところで、まさにこの「性的差異」(différence sexuelle)を思考の核に据えた哲学者がいた。それが「エクリチュール・フェミニン」の思想家、英米圏では「フレンチ・フェミニズム」と総称される思想家の一人であるベルギー出身のリユス・イリガライ(1930-)である。作家であるエレヌ・シクスー(1937-)と同様に、女性的に書くことや語ることを、思考することを哲学ならびに精神分析的な観点から探究したイリガライにとって、女性的なエクリチュールとは差異化の運動そのものであり、形態の過剰としての不定形を特徴とするものである。彼女が言うように、それは「かたく」、はっきりとした形をもち、形態変化を伴わない剛体的な男性の言説とはまったく異なる流体的なものであり、その意味では「やわらかい」ものであると言えるだろう。しかし、この「やわらかい」エクリチュールはおだやかで、柔和で、堅苦しさのないジェンダー・ステレオタイプとしての「女性らしい」エクリチュールではけっしてない。というのも、その「やわらかさ」は固定的な形態からはみだし、男性的な言説を解体する力動的な差異化の運動における特徴だからである。本稿では、イリガライのこのような「差異」(différence)の哲学に寄り添いながら、「女性的に書く」とはいかなる身振りかを検討していくこととする。

2. 性的差異の思想は本質主義に陥るか

まずはイリガライについて、思想史におけるその位置づけを概略的に示しておきたい。「性的差異」というテーマから推察されるように、彼女にとって「差異」は重要なキーワードであり、彼女の思想史上の立ち位置にも大きく関係する。

二〇世紀後半、女性の権利や地位の向上を求めたフランスの女性解放運動は、いわゆる平等派と差異派という二大潮流に分裂していった。平等派ないし普遍主義と呼ばれる陣営には『第二の性』で有名な哲学者シモーヌ・ド・ボーヴォワールの思想を継承したクリスティーヌ・デルフィ(1941-)をはじめとする社会学系のグループが属し、歴史的・社会的に構築された男女の性差を認めず、性差による不平等の解消を目指す点が強調された。それに対して、アントワネット・フーク(1936-2014)ら率いる精神分析を基軸としたグループ「精神分析と政治」^{フシシケボ}が属するのは差異派ないし差異主義の陣営であり、平等であるということは性差がないことを意味しないという考えが表明された。イリガライやシクスー、そしてブルガリア出身でフランスの文学理論家であるジュリア・クリステヴァ(1941-)らは、後者の周辺にいたことから「差異派のフェミニスト」と呼ばれることが多い。ただし、フランスにおいて「フェミニスト」と言えば前者の平等派を指しており、差異派は自称として「フェミニスト」という語を原則として用いてはいなかった。だが、アメリカではイリガライ、シクスー、クリステヴァらの思想のほうが「フレンチ・フェミニズム」として輸入され、差異派に近い彼女たちこそがフランスの「フェミ

ニスト」だと見なされたのである¹⁾。このように、彼女たちの思想は国や語圏を超えて振れを伴うかたちで受容されているが、いずれにせよ女性学の歴史においても、そのような枠を取り払った哲学・思想史においても「差異」を戦略素のひとつとしていることにちがいはない。

それにしても、「差異」はフェミニズムやジェンダー研究の文脈において厄介な語のひとつである。平等派の立場からすれば、差異派の思想は男性と女性の差異を認めることで男女の二元論をふたたび強化する思想であり、生物学的決定論に回帰しかねないと危険視されていたとしても不思議ではない。実際、イリガライの「性的差異」の哲学は幾度も本質主義の謗りを受けてきた²⁾。つまり、男性と女性のあいだには埋めがたい生物学的な差異があるのだから、女性には女性特有の本質があると彼女が規定しているかのように理解されるきらいがあるということだ。とはいえ、本当にイリガライの哲学は本質主義に陥っているのだろうか。そうだとすれば、彼女において「女性的に書くこと」や「女性的に語ること」はいわゆる女性器を備えた身体をもつ者に限定されてしまい、「女性」という語が含意する範囲はきわめて狭いものとなる。そして、そのような局限された意味での女性のエクリチュールは、「男性は論理的で、女性は感情的だ」と言われるように、論理的な男性のエクリチュールの陰画として、非論理的で感情的なもののように受け取られてしまうかもしれない。事実、「エクリチュール・フェミニン」の思想家たちの文章は難解であることから、これまで彼女たちのエクリチュールが「非合理的」といった形容詞によって修飾されることも多かった。こうしたことから、「性的差異」の思想が「男性は論理的で、女性は感情的だ」という言説の再生産に加担してしまう可能性もゼロではないのである。

思想史において平等派と差異派の分類を行うことはたしかに必要な作業であり、イリガライがどのあたりに位置づけられているのかをあらかじめ念頭に置いて考察することは重要だ。ただし、「差異派」という語に含まれる「差異」が何を言わんとしているのかには注意を向けなければならない。この言葉に気を取られると、「差異」があたかも男性と女性のあいだの固定的な差異であり、間違い探しのように指摘することができる可視化された差異であると誤解される恐れがある。だが、そこには「差異」という語の一般的な意味によって見落とされてしまっている「差異」があるのではないだろうか。イリガライが自身の哲学の鍵とする「性的差異」は、たとえば生殖機能などにかんして普段私たちが性差として思い浮かべるあの差異とは決定的に異なっていると考えられるのである。

3. 脱構築思想における「差異」

したがって、ここで問題となるのはイリガライの「差異」の内実である。差異派フェミニズムの概説的な理解における差異と、イリガライの哲学にみられる「差異」の相違点がどこにあるのかを私たちは問わねばならない。その際、導きの糸となるのはイリガライと同年生まれのジャック・デリダ（1930-2004）の哲学における「差延」（différance）であろう。なぜなら、イリガライの「差異」はデリダの「差延」によって補足されることの多いキーワードであるとともに、両者はハイデガーの「存在論的差異」を念頭に置きながら「性的差異」について論じるなど共通点も多いからである³⁾。そして、フランスの差異派フェミニズムに近い思想家たちは、同世代ないしは少し年上の差異の哲学者デリダの脱構築思想からの影響を多かれ少なかれ受け

ていた。この影響は、イリガライ、シクスー、クリステヴァといった思想家にとどまらず、フランスの通称「パリテ法」制定に尽力したフランスの哲学者シルヴィアンヌ・アガサンスキー(1945-)らにまで及んでいる。そのため、デリダの「男根ロゴス中心主義」(phallogocentrisme)に対する批判的な視点を共有した彼女たちの思想は、明らかに脱構築思想の系譜のなかで考察されてしかるべきものであり、彼女たちがデリダ哲学の正統な同志であり後継者でもあるとすれば、彼女たちの思考する「差異」をデリダの「差延」にもとづいて捉え直しておく必要がある。

それでは、デリダの脱構築思想における「差延」とはいかなるものであり、それは一般的な意味での差異といかなる点で異なっているのか。この問題を解決するために、ここではデリダのあるテキストの初出版と書籍版の異同に着目してみたい。彼はその論考がはじめて誌面に掲載された初出版で「差異」と書いていた部分を、書籍に収録するにあたって「差延」と書き改めることがある。ここに、一般的な意味での差異とデリダ的な意味での「差異」=「差延」の違いを探るヒントが隠されている。たとえば『エクリチュールと差異』(1967)に収録されたフッサール論「[「発生と構造」と現象学」(1965)では、デリダがフッサールの「厳密な学としての哲学」とは区別される「世界観哲学」について論じるなかで次のように述べている。初出版と書籍版を比較してみよう。

(初出版)

したがって、世界観の理論をそれ固有の領域の厳密な境界に連れ戻し、この理論をそこに還元しなければならない。この領域の輪郭線は知恵と知とのある種の差異〔différence〕によって描かれている。[...] この還元しえない差異〔irréductible différence〕は、理論的根拠の終わりなき差異〔différence〕に起因している。(Derrida 1965: 251)

(書籍版)

したがって、世界観の理論をそれ固有の領域の厳密な境界に連れ戻し、この理論をそこに還元しなければならない。この領域の輪郭線は知恵と知とのある種の差異〔différence〕によって描かれている。[...] この還元しえない差異〔irréductible différence〕は、理論的根拠の終わりなき差延〔différance〕に起因している。(Derrida 1967: 239 = 二〇一三: 三二二)

初出版では「理論的根拠の終わりなき差異」とされていた箇所が、書籍版では「理論的根拠の終わりなき差延」に修正されている。「還元しえない差異」が結果として生じてくるのは、その原因の位置に通常の意味での差異とは異なる「差延」が設定されているからだ、ということになる⁴⁾。ここでの「理論的根拠の終わりなき差延」はいったい何を意味しているのだろうか。同じく『エクリチュールと差異』に収録された「フロイトとエクリチュールの舞台」(1966)に目を向ければ、初出版・書籍版ともに「単一な起源の起源的な間隔化〔espacement〕、差延〔différance〕、消え去り〔effacement〕」(Derrida 1967: 334 = 二〇一三: 四五五)という表現を見出すことができる。ここでデリダは単一の起源や根拠の絶対性を揺るがすもの、すなわち起源や根拠にあらかじめ含み込まれているたえざる差異化の運動について論じている。彼によれば、

「理論的根拠」にしる「単一な起源」にしる、それをそれ自体で根拠や起源たらしめることはできず、つねにそれを根拠づける別の根拠が必要になる。だが、絶対的な根拠や起源が存在しない以上、別の根拠を求める運動は無限遡行的に延々とつづくこととなり、根拠や起源は最初に設定されていた位置から次第に遠ざかっていく。この隔たり、このズレの運動こそが「差延」であり、デリダはこのような「差延」を「絶対的過剰の差延」[*différance de l'excès absolu*] (Derrida 1967: 96 = 二〇一三: 一二一) とも言い表している。要するに、「差延」とは終わりなくおのれ自身を乗り越えていく自己差異化の運動を指しているのである。

ここで注意すべきは、この差異化の運動が「還元しえない差異」を生み出すという点である。どういうことか。「還元しえない」[irréductible]という形容詞はラテン語の原義に立ち返れば「連れ戻す」(reductum)に否定辞を冠した言葉であり、「～に連れ戻すことができない」ということを意味している。別様に言えば、「還元しえない」とは何らかの固定的なもの、定められたかたちをもつもの、規定可能な語や数学的な単位といった枠組みのなかに無理やり閉じ込めることができないということである。そのため、目に見えず、端的に言葉で言い表すことができず、測定することもできないような差異が「還元しえない差異」である。そうだとすれば、デリダが一般的な意味での差異と区別する「差延」、「還元不可能な差異」を生じさせる「差延」は、もはや何かと別の何かのあいだの差異ではないということになる。日常言語において用いられる差異は何かと別の何かのあいだにあるちがいや差を指しており、それを指し示すにはあらかじめ同一性を有するものをそれぞれに定立したあとでなければならぬ。日常言語における差異とは、花瓶と写真立てをそれぞれ机に置き、そのあいだの距離を測るようなイメージのもとにある。これに対して「差延」は、基準となる何かとは別の何かを措定し、両者のちがいや差を計測するわけではなく、まさにあいだを開くという意味での「間隔化」を指している。それはただひたすらにあいだを開き、差異化していく運動であることに尽きる。したがって、デリダ的な意味での「差異」=「差延」とは何かと別の何かのあいだの端的な差異を指すのではなく、終わりなき転位の運動なのである。

以上のように、デリダの脱構築思想の中心に位置するキーワード「差異」=「差延」の内実を踏まえば、「差異派のフェミニスト」と呼ばれるイリガライの哲学における「差異」ないし「性的差異」を理解するためのヒントが得られるのではないかと考えられる。つまり、イリガライにとってもまた「差異」とは何かと別の何かのあいだの差異ではなく、差異化の運動を指していると仮定することができるのだ。そうであれば、彼女の哲学は男女の根本的な性差や本質主義を掲げるものではなくなるだろう。「差異派」の「差異」は、そこに属していると見なされる思想家の全員にとってではないにしろ、デリダの言う「差延」としての「差異」の意味合いが強い場合がその思想的影響関係から想定されうる。こうしたことを念頭に置きながら、以下ではイリガライの著書『ひとつではない女の性』(1977)に即して議論を進めていこう。

4. 見かけ上の本質主義

たしかに、一見するとイリガライの記述は男女二元論を強化していると受け取られかねない保守性を備えている。彼女の著作のいくつかを手にとれば分かりますとおり、そこでは典型的な女

性と男性の身体，より具体的に言えば性器にもつづいたイメージが多用され，あたかも生物学的性差に則って「差異」が論じられているかのような印象を読者に与える。

男性はみずからに触れるために手や女性器や言語などの道具を必要とする。そして，その自己触発は最小限の活動を要求する。それに対して女性は媒介を必要とせず，まさに能動と受動が区別されうる以前に，自身においてみずからと触れあう。[...] というのも，女性器はたえずくちづけしあうふたつの口唇でできているからである。(Irigaray 1977: 24 = 一九八七: 二四)

ここでは男性の「自体愛」(auto-érotisme)が媒介性に，女性のそれが直接性に割り振られ，双方の「自体愛」の在り方が二項対立的に語られているようにみえる。そして，実際の性器の形状に即したかたちで，彼女の哲学において重要な役割を与えられている女性器の陰唇のイメージが登場する。この陰唇があることによって，女性は自身のうちでみずからを愛撫し，自己自身の身体に向かう性活動のために第三者を道具的に用いることはないとされる。くちづけしあう口唇のような陰唇からすれば，そのあいだに割って入ってくる男根は明らかに暴力的なイメージであり，女性の自体愛を引き裂く「強姦者ベニス」(Irigaray 1977: 24 = 一九八七: 二五)とまで言われる始末である。このように，男性器は基本的にネガティブなものとして表象され，それによって「男根ロゴス中心主義」に対する彼女の批判的な姿勢がはっきりと示されている。その一方で，性器の形態に即した描写はいわゆる女性的身体と男性的身体を前提としているようであり，たとえばインターセックスやトランスジェンダーの身体と性の関係を考慮したことが明確に読み取れるイメージは用いられていない。こうしたことから，イリガライの哲学では生物学的決定論がその基盤にあると誤読されかねないイメージや言い回しがたしかに援用されているのである。

そのうえ，イリガライは書くことや話すことにかんしても「男性は論理的で，女性は感情的だ」とする固定観念をなかば踏襲していると読者に思わせる記述を行っている。

女性はけっして同じようには話さない。彼女が述べることは流れ [fluent]，揺れ動く [fluctuant]。つまり，曖昧にする = 騙し取るのだ [flouant]。原義 (固有なものの意味) を失うことなしには，女性の話は聞いてもらえないのである。ここから「主体」の手には負えないこの声に対する抵抗が生じる。そのため主体はおのれの範疇のなかでこの声を凍らせ，その流れを停止させてしまうだろう。(Irigaray 1977: 110-111 = 一九八七: 一四四)

彼女はここで，女性が話したり書いたりしていることの意味がはっきりとせず流動的であること，すなわち女性の話が論理的な一貫性をもたず，発される言葉が確固として規定された意味にすらもつづいていないことを述べている。引用では「感情的」という形容詞が用いられているわけではないものの，女性の話が行き着く先もなく，その内容が不明瞭なままだどこかに流れ去ってしまうような事態を読者に想起させ，少なくともそれが非論理的な言説だということを示している。それゆえ女性的言説は，歴史的に「主体」であることを長らく担ってきた男性

的＝論理的言説にとっては捉えがたく意味の分からないものであり、彼らに話を聞いてもらうためには、その流れるような性質を無理にでも押しとどめ、凝固させなければならない。あるいは、彼女たちの発する言葉の意味を、それぞれに固有の意味に拘束することから彼ら自身を身を引く必要がある。これらの点を踏まえれば、イリガライにおける女性的な語りにかんする描写は「男性は論理的で、女性は感情的だ」という間違っただけの言説を強化するような危険性を有している。

したがって、イリガライが「性的差異」を論じる際には、それがセックスであれジェンダーであれ男女の二項対立が前提とされているような記述が目につき、女性と男性のあいだにはあたかも目に見える固定的な差異があるかのようである。しかしそうだとすれば、イリガライの「差異」ないし「性的差異」はデリダ的な意味での「差延」ではけっしてなく、何かと別の何かのあいだの端的な差異にとどまってしまう。言い換えれば「男性とは……である」、「女性とは……である」と規定したうえで、そのように定立したふたつの主体のあいだにいかなる差異があるかということだけが問われるようになってしまうのである。

5. 女性的なものの規定一分割不可能性

だが、事はそう単純ではない。イリガライは女性器の形状に根差したイメージを用いながらも、女性の身体性を何らかのかたちで規定しようものだと考えているわけではないのである。さらに彼女は、女性器をもつ者だけが女性であると断言することもない。人間の身体、とりわけ性器にもとづくイメージが生物学的性差に依拠しているような印象を読者に与えているとしても、それによって彼女を本質主義だと断定するのはやはり性急であり、読者自身がテキストの表層的な読みにとどまっているにすぎないのである。なぜなら、彼女の言う「女性」ないし「女性的なもの」は「女性とは……である」という言明とは完全に相容れないものだからである。

それから何度も私が、……ではない [pas], ……でもない [ni], ……なしに [sans] と強調するのは、私たちが裸でしか触れあわないことを、あなたに、私たちに思い出させるためなのだ。それに、こんなふうに私たちがふたたび見出すためには、私たちが多くを脱ぎ捨てなければならないということも思い出してほしい。たくさんの表象と見た目が私たちが互いに遠ざけている。こんなにも長いあいだ、彼らはみずからの欲望で私たちが覆ってきたし、私たちのほうも彼らに気に入られようとして何度も着飾ってきたから、私たちは自分の肌を忘れてしまった。肌の外で、私たちは隔たっている。あなたと私が引き離されたまま。／いいえ、あなたとか私とか、それだけでもう言いすぎている。私たちのあいだを切り離しすぎている。私たちのすべてを。(Irigaray 1977 : 216-217 = 一九八七 : 二八七 - 二八八)

イリガライはここで自身の記述に対して自己言及的な態度をとっている。つまり、「……ではない」、「……でもない」、「……なしに」という否定表現は、「女性とは……である」という言明における規定の暴力性を回避する言い回しであり、それによって「裸」や「肌」を想起させる

ための表現にもなっている。引用から読み取れるように、彼女にとって「……である」という規定は、ある対象にそれが望んでもいない衣服を無理やり着せるような行為であり、何らかのレッテルを貼ることと同義である⁵⁾。そのため、「女性とは……である」という外部からの規定によって女性の本質を決定づけるような書き方を、実はイリガライ自身はしていないということが強調されている。

そして、外部規定としての衣服を拒否することで、イリガライは「裸」や「肌」といった表現を用いて女性に固有の身体を描き出そうとしているわけでもないのである。不本意に着せられていた衣服を脱ぎ捨てたあとに残るのは、本当の「裸」や本当の「肌」としての女性の真理ではなく、むしろ別の箇所で「私たちの肌ではないのに、固有の肌に包まれている」(Irigaray 1977: 205 = 一九八七: 二六八)と言われるように、「固有の肌」もまた私たち自身の肌ではないと考えられている。もちろん「肌」も身体に根差したイメージではあるが、生物学的にもたえず古い細胞が新しい細胞に入れ替わっていくように、ここでの「肌」は確固たる主体とその外部との境界線のようなものではなく、流動的でつねに変化のなかにあることを示唆するイメージなのである。そのため、イリガライは「肌」や「裸」といった表現によって女性の身体が何らかの本質を備えているとは考えておらず、私たちが彼女のテキストにしっかりと寄り添えば、彼女が本質主義の思想家として批判されるような立場をとっていないことが読み取れるのである⁶⁾。

そのうえ、エクリチュールの次元においてもイリガライは「女性的なもの」を「男性的なもの」に対置させるようにして語りたいわけではないことが、トゥールーズ大学における哲学ゼミでの質問への応答から読み取ることができる。ここで彼女は「女性性にかんする〔フロイトとは〕別の概念の練り上げは可能か」(Irigaray 1977: 121 = 一九八七: 一五九)という問いに対して次のように答えている。

女性的なもの [le féminin] を概念 [concept] という形式で表現すると主張すれば、またもや女性的なものは「男性的な」表象体系のうちに捕らえられてしまいます。そこにおいて女性たちは、(男性)主体の自己触発に奉仕する意味のエコノミーの罨にかけられてしまうのです。まさに「〔フロイト的〕女性性 [la « féminité »]」を槍玉にあげるとしても、だからといって他の「概念」を練り上げることが問題となるわけではありません。(Irigaray 1977: 122 = 一九八七: 一六〇)

一般に、フロイトにおいて女性性は「ペニス羨望」や「受動性」の観点から特徴づけられ、主体である男性性に対して客体の位置に置かれている。このような男根中心主義にイリガライが反旗を翻していることはよく知られているが、学生は彼女に対してフロイトの女性性とは異なる別の女性性概念を創造することはできるのかと質問する。これに対してイリガライは、定冠詞付きの「女性性」ではなく、形容詞の名詞化としての「女性的なもの」を提示し、これが彼女の哲学のなかでひとつの概念としては機能していないことを説明する。フランス語で概念を意味する « concept » はラテン語の « conceptum » に由来し「しっかりと掴み取られたもの」(Littré 1873: 711, 713)を意味するが、彼女からすればこれは男性的言説に特徴的なものである。

なぜなら、概念は移ろいゆく意味をひとつの堅固な枠組みによってしっかりと掴み取り、その特殊な流れをとどめて普遍的なものを形成するからである。それは流動的で確固たる形態をもたない「女性的なもの」を凝固させてしまうだろう。それゆえ、もしフロイトとは異なる女性性概念を形づくるのだとすれば、それは概念把握という男性的な言説のシステムをそのまま踏襲することを意味し、男性性と対等な新たな女性性を、つまりは女性の主体性を確立することとなる。もちろん、実社会における女性の主体性の確立はいまだにひとつの有効なテーマとなりうるが、エクリチュールの次元におけるそれは男性的な主体の定立に対して女性的な主体を定立し、両者の端的な差異を問うことに行き着いてしまう。それはデリダの言う「還元しえない差異」としての「差延」とは異なり、どこがどうちがうのかを言語化することのできる差異である。しかしデリダと同様に、イリガライにとっての「差異」もまた概念化しえない差異であり、男性的な言説形態を超え出る過剰としての、そこから流れ出ていくかたちでの「間隔化」としての差異にほかならない。だからこそイリガライは、女性と男性という既存の二項対立的な語彙を用いるという表面的には読み取りづらい記述を行いながらも、この対立図式に取り憑き、新たな女性性概念を創設することなく、女性の主体定立という男性的作用を行使するのは別の仕方では、男性的な言説のエコノミーから逃れ出る「女性的なもの」を語ろうとするのである。

したがって、イリガライにおける「女性的なもの」は規定不可能で概念を超出する運動性として理解すべきものであり、そこでは「女性的なもの」を静態的かつ男性的な「一〔un〕」ないしは「同〔le même〕」に回収することを徹底的に回避した思想が展開されているのである。こうしたことは、上の議論で取り上げてきた著書『ひとつではない女の性』というタイトルからも読み取れる。原題である「Ce sexe qui n'en est pas un」を直訳すれば「一ではない性」となるが、この関係節では不特定なものを表す中性代名詞「en」が「sexe」を受けており、性が「一」に集約されるようなものではないことが暗に示されている。それはたんなる性の複数性という議論（中嶋 二〇〇二：一八四―一八五）に尽きることなく、性がひとつひとつ数えられたり区切られたりすることのできない在り方をしているということをも含意している。そのような意味においても、イリガライの「差異」ないし「性的差異」は明確に区別された複数のもののあいだの差異ではなく、流出や過剰や運動とは切り離しえない差異化として解釈される必要があるだろう。まさにこの力動的な運動を、彼女は「女性的なもの」と名づけているのである。

6. おわりに——「女性的に書く」とはいかなる身振りか

以上の議論を踏まえれば、「女性的に書く」とは規定や断定を廃した仕方では、すなわちあるものを意味の一義性に還元することを拒むことで、「……は……である」という男根ロゴス中心主義的なエクリチュールを解体しながら書くこととなるだろう。イリガライにとって「女性的に書くとは……である」というふうに一概には説明しえない以上、読者はテキストの暗礁のなかに注意深く進んでいくことでしか彼女のエクリチュールを理解することができず、その身振りを模倣することもできない。だが、それは何も女性的なエクリチュールがまったくもって非合理的であり、感情的な言葉のざわめきであるからではない。そこではむしろ一貫して脱構築思

想の論理が背景をなしている。デリダが話し言葉としてのパロールと書き言葉としてのエクリチュールの伝統的な対立を踏まえつつもそれを乗り越えるために、この二項対立にはおさまらないものを歴史的に劣位に置かれてきたほうの名である「エクリチュール」と呼ぶように、イリガライもまた男女の二項対立を、さらにはひとつの単位としての性にはおさまりきらない性を言い表すために、いまなお劣位に置かれている「女性」ないし「女性的なもの」を戦略的な術語として選択しているのである。その際、彼女はたとえば「クィア」のような新たな言葉を用いない。なぜならそれは、男性と女性、さらにはクィアというようなかたちで第三項や別の主体の定立を行うことでしかなく、このような指定は男根ロゴス中心主義に則った方法でしかないと考えるからである。男女二元論を超過するものをあえて「女性」や「女性的なもの」と名づけることによって、イリガライは既存の女性の意味を拡張しているのである。

哲学のテキストが中性的ではなくあまりにも男性的なエクリチュールで紡がれてきたからこそ、彼女は哲学的言説を「女性的なもの」によって攪乱し、そのなかに「性的差異」の問題を秘かに滑り込ませていく。それは男性と女性のあいだの端的な差異ではけっしてなく、意味のズレという「差延」の運動にもとづいた力動的な差異化の運動をエクリチュールのなかで生じさせることにほかならない。

本研究は下記の助成を受けたものである。

- ・JSPS 科研費 (19K23058)
- ・2019年度立命館大学国際言語文化研究所萌芽のプロジェクト研究助成プログラム「異なる者」たちの共生を目指して：差別をめぐる二十世紀フランス思想史の研究」
- ・2020年度立命館大学研究推進プログラム（科研費獲得推進型）「脱構築思想における性的差異の問題——デリダ哲学とその継承者たちの思想の射程」

注

- 1) フランソワ・キュセは、フランス現代思想を代表するフーコーやデリダ、ドゥルーズらの思想がアメリカの思想界に影響を与え、この地を経由して世界中に伝播されるなかで彼らの思想が変容を被ったことなどを整理し、この現象を「フレンチ・セオリー」と名づけた。そのような意味では、アメリカに輸入されたことで「フレンチ・フェミニズム」と呼ばれるようになり、英米圏の論者に様々な仕方を取り上げられたイリガライ、シクスー、クリステヴァらの思想もまた「フレンチ・セオリー」に含まれるものである。だが、キュセの著書で彼女たちははじめから「[アメリカから見て]大西洋の彼方のフェミニズム思想家」の第二世代として紹介されており、言及箇所も片手で数えられるほどである。したがって、彼女たちの思想は「フレンチ・セオリー」においては周縁的なものとして扱われている点が指摘できる。Cf. Cusset 2005: 161-162 = 二〇一〇: 一三九—一四〇。
- 2) イリガライに対してなされる本質主義という批判は、それをある種の戦略として擁護する立場も含めると枚挙に暇がない。本稿を執筆する際には次の文献を参照した。Cf. Spivak 1992: 74. Elam 1994: 62. Butler 2015 [2007]: 41, 214-215 = 二〇一八: 六七, 二六八。加藤一九九八: 五—一八四。中嶋二〇〇二: 一九〇。
- 3) イリガライが存在論的差異について触れた『空気の忘却——マルティン・ハイデガーにおいて』と、のちに『ブシュケー——他なるものの発明II』に収録されたデリダの「ゲシュレヒト——性的差異、存在論的差異」は偶然にも発表年が同じである。Cf. Irigaray 1983. Derrida 1983: 571-595 = 二〇一九: 一一

-三八。

- 4) 『エクリチュールと差異』所収の「人間科学の言説における構造、記号、遊び」では「この還元しえない差異という差延 [différance de cette différence irréductible]」（Derrida 1967 : 428 = 二〇一三 : 五九一）と書かれており、「還元しえない差異」と「差延」はほとんど同義である。
- 5) このような考えは、フェミニズムの文脈において男性中心主義的だと批判を浴びることの多いジョルジュ・バタイユの思想のなかにも見出すことができる。彼は『ドキュマン』に掲載された「批判辞典」の項目である「不定形の」で次のように述べている。「たしかにアカデミックなひとびと〔hommes académiques〕が満足するには、万物がかたちをもつ〔l'univers prene forme〕必要があるのだろう。哲学なるものの全体は、これ以外の目的をもつことはない。つまり、在るもの〔ce qui est〕にフロックコートを、数学的なフロックコート〔redingote mathématique〕を与えることが重要なのだ。それに対して、万物は何ものにも似ておらず、不定形でしかないと主張することは、結局のところ万物は蜘蛛や唾のような何ものかだと言うことになるのである」（Bataille 1970 [1929]: 217= 二〇一四 : 一四四）。このように、バタイユにおいても一定のかたちを外部から与えることは、男性用の礼装とされるフロックコートを着せることに例えられ、「……である」という規定的な言明が男性的なエクリチュールとの親和性が高いこと、ならびにバタイユ自身もまた男根ロゴス中心主義に対して批判的なまなざしを向けていることをこの引用は証し立てている。
- 6) これにかんしては、アメリカの脱構築系フェミニストかつ法・政治哲学者であるドゥルシラ・コーネルが、デリダの「差延」とも関連づけながら次のように述べている。「〔…〕デリダは概念化しえない差異を指し示すために、代補や差延などの多様な修辭的戦略を採る。同様に、イリガライは〈女性〉を概念化しようとはせず、その本質を規定しようとしめない〔…〕／言い換えれば、彼女のエクリチュールが女性の身体を女性性の本質とする記述を私たちに与えることはないのである」（Cornell 1999 : 182-184= 二〇〇三 : 三九七-四〇〇）。

引用・参考文献

- Bataille, Georges, 1970 [1929], « Informe », *Œuvres complètes*, tome I, Gallimard. (= 『ドキュマン』江澤健一郎訳, 河出書房新社 (河出文庫), 二〇一四年)
- Butler, Judith, 2015 [2007], *Gender Trouble: feminism and the subversion of identity*, Routledge (Routledge classics). (= 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳, 青土社, 新装版, 二〇一八年)
- Cornell, Drucilla, 1999, *Beyond accommodation: ethical feminism, deconstruction, and the law*, new edition, Rowman & Littlefield. (= 『脱構築と法——適応の彼方へ』仲正昌樹監訳, 岡野八代・望月清世・久保田淳・藤本一勇・郷原佳以・西山達也訳, 御茶の水書房, 二〇〇三年)
- Cusset, François, 2005, *French theory: Foucault, Derrida, Deleuze & Cie et les mutations de la vie intellectuelle aux États-Unis*, La Découverte, coll. « La Découverte/Poche ». (= 『フレンチ・セオリー——アメリカにおけるフランス現代思想』桑田光平・鈴木哲平・畠山達・本田貴久訳, NTT出版, 二〇一〇年)
- Derrida, Jacques, 1965, « Genèse et structure » et la phénoménologie », in *Entretiens sur les notions de genèse et de structure*, sous la direction de Maurice de Gandillac, Lucien Goldmann et Jean Piaget, Congrès et colloques / École pratique des hautes études, Mouton.
- Derrida, Jacques, 1967, *L'écriture et la différence*, Seuil, coll. « Points ». (= 『エクリチュールと差異 (新訳)』合田正人・谷口博史訳, 法政大学出版局, 二〇一三年)
- Derrida, Jacques, 1983, « Geschlecht : Différence sexuelle, différence ontologique », in *Cahier de L'Herne : Martin Heidegger*, L'Herne, coll. « Le livre de poche. Biblio essais ». (= 「ゲシュレヒト I——性的差異, 存在論的差異」『ブシュケー——他なるものの発明 II』藤本一勇訳, 岩波書店, 二〇一九年)

- Elam, Diane, 1994, *Feminism and deconstruction*, Routledge.
- Irigaray, Luce, 1977, *Ce sexe qui n'en est pas un*, Minuit, coll. « Critique ». (= 『ひとつではない女の性』 棚沢直子・小野ゆり子・中嶋公子訳, 勁草書房, 一九八七年)
- Irigaray, Luce, 1983, *L'oubli de l'air: chez Martin Heidegger*, Minuit, coll. « Critique ».
- Littre, Émile, 1873, *Dictionnaire de la langue française*, tome I, Hachette.
- Saini, Angela, 2017, *Inferior: How Science Got Women Wrong—and the New Research That's Rewriting the Story*, Beacon Press. (= 『科学の女性差別とたたかう——脳科学から人類の進化史まで』 東郷えりか訳, 作品社, 二〇一九年)
- Spivak, Gayatri Chakravorty, 1992, “French Feminism Revisited: Ethics and Politics”, in *Feminists theorize the political*, Judith Butler & Joan W. Scott (eds.), Routledge.
- 加藤秀一, 一九九八, 『性現象論—差異とセクシュアリティの社会学』, 勁草書房。
- 財津亘・金明哲, 二〇一八, 「性別を偽装した文章における文体的特徴の変化」, 『同志社大学ハリス理化学研究報告』, 同志社大学ハリス理化学研究所, 第五九卷三号。
- 中嶋公子, 二〇〇二, 「リュス・イリガライ「ひとつではない女の性」」, 江原由美子・金井淑子編『フェミニズムの名著50』, 平凡社。